人生振り返れば、同期に感謝

岡山大学名誉教授　加藤 宣之 （20 期 1977 年卒）

43 年ぶりに札幌に戻ってから 2 年、そして芳香 ESSAY「研究者の魂源」を書いてからも 1 年ほどすぎた。時間に少し余裕ができたので、学生時代のある出来事を書いてみることにした。

話は、薬学部移行直後のちょうど 50 年前に遡る。

その前に、私が通った高校と北大教養のことを少し書いておこう。私は道東で生まれ育ったが、札幌旭ヶ丘高校に越境入学し、南区川沿に住んでいた祖父母や伯父の家から 1 時間以上かけてのバス通学となった。本当は札幌南高校が近かったのだが、当時学園紛争で荒れていたので受験しなかった。入学式では宣誓書を読み上げ、3 年間学業に邁進しながらも生物部でシダの研究を行い楽しんだ。牧野富太郎博士の作成した植物図鑑では北海道で自生していないとされていたシダ「イワオモダカ」を道に迷いながらも野幌原始林内で偶然発見し、全道高等学校理科研究発表大会で賞をもらったことが嬉しいできごとだった。3 年になると進路指導や担任の先生からは、北大医学部を受験するように勧められたが、「医師は悪徳」というイメージが強く、先生への反発心や両親に「浪人はダメ」と言われていたこともあり、合格率 99%だった北大理類を受験し昭和 47 年 4 月に入学する。そして、北 16 条東 4 丁目の下宿で 1 人暮らしを始めた。2 階の屋根裏風で畳が 5 枚並んだだけの変則的な部屋であった。

教養 1 年目の初夏、製図の授業で、これからの話のキーマンとなる伊達市出身のN君に出会い、すぐに仲良くなった。当時は大学紛争によりバリケードが築かれ休講になることも多かったので、大学に近かった彼の下宿先に入り浸ってギターや将棋を楽しんでいた。2 年目の夏、教養科目での成績順に決まっていく学部移行で、私は薬学部製薬化学科、N君は理学部数学科に進むことになる。

そして、10 月からいよいよ講義が始まり、薬学科と製薬化学科の 80 名が、連日朝から夕方まで講義室に缶詰となった。ほぼ全員が出てきているような状況だったので、あえて出席をとるということもなかった。座学に疲労感を意識しはじめたある金曜日の午後、へその下あたりになんとなく違和感があった。翌朝、微熱があったものの講義を欠席するほどでもないと思い、1 時限目から講義を受けていたが、発熱を感じ腹痛もでてきたので 2 時限目の受講はやめて下宿先のすぐ近くにあった医院を初めて受診した。医師からは、

「風邪でしょう。栄養のあるものを食べてゆっくり休んでください。」

といわれ、薬をもらって帰宅した。そのころは 38 度の熱になっていたので栄養をつけなければと思い、バナナや菓子パンを食べ牛乳を飲んで寝ていた。しかし、夕方になると気分まで悪くなり、吐き気が襲ってきた。

「こりゃおかしい。いつもの風邪とは違う。」

と思い、高校時代お世話になった伯父に電話で異変を伝えた。叔父は 1 時間ほどで駆けつけてくれて、大通りにある夜間急病センターに連れていってくれた。このとき初めて右の下腹に痛みを感じるようになり血液検査の結果、白血球数は 1 万を超えていた。その場で、

「盲腸のようですね」

との診断を受けた。当時は虫垂炎のことを盲腸と呼んでいた。その後、紹介してもらった豊平区の病院に到着し楽観したのも束の間、

「先生は帰られました」

と看護婦さんがいう。具合が悪いがゆえの不満が爆発しそうになる。叔父も

「何とかなりませんか」

と粘る。先生から指示を受けたらしい看護婦さんが太い注射器を持って現れ、

「ちらす注射をしますので、そのあと一旦帰宅して明日、休日担当の病院に行ってください。」

と告げられた。やむを得ず、叔父の家で一夜を過ごすこととなった。

この一夜が大変だった。いつも祖父母が寝ている部屋に布団が 2 つ敷かれ祖母が付き添ってくれた。横になった途端、吐き気が襲ってきて、私は激しく嘔吐した。なんど吐いたか分からないほど吐き、吐汁も黄色から見たこともない緑色になり眠るどころではない。そして朝方には、吐く力もなくなるほどぐったりした状態になった。一睡もせずに見守ってくれていたらしい祖母は

「このまま死ぬのではないか」

と思ったそうである。
　翌朝早く叔父が地下鉄南北線の麻生駅近くにあった休日当番病院に連れて行ってくれた。私は、まったく余力のない状態だった。それでも、ようやく手術してもらえる病院にたどり着いたという安堵感があった。ところが、
「今日は手術が 5 件あって、あなたは 4 番目で夕方になりますよ」
と看護婦さんから聞き、失望感に変わった。大部屋に用意されたベッドに横たわりひたすら待つことになった。意識はあったが、もうどこが痛いのか分からなくなっていた。午後になって空いていた隣のベッドに 30 歳位のAさんが売店で購入したという寝巻きなどを抱えてやってきた。自動車会社に勤めているが、1 週間休暇をもらって慢性盲腸の手術を受けるのだという。休日予約していたのだろうが、3 番目だという。
「こんな元気な人が･･･私より先？」
と心の中で叫んだが何も変わらない。
「ではお先に」
とAさんは軽やかに部屋を出て行った。
　1 時間ほどしただろうか。私も手術室に運ばれた。手術台の上でエビのような形になって横たわるように指示され、腰より少し上あたりの背中に麻酔薬の注射を受けた。次第に下半身の感覚がなくなってきたようだが、意識はしっかりしている。
「では始めますよ」
と医師から声をかけられた。痛くもかゆくもないなあと思っていると、
「そこじゃない！」
という大きな声が響き、そのあと、
「こりゃひどい！」
「おれがやる」
という声が続いた。あとで知ったことだが、インターン（現在の研修医にあたる）が執刀しようとしたところ、盲腸が破裂して腹膜炎を起こしていたために手におえないと判断した院長が自ら執刀してくれたということだった。ちなみに 3 番目のAさんはこのインターンが執刀したそうだ。
　私の手術時間は長かった。つらさを感じ始めたとき、
「もう少しで終わるよ」
という声が聞こえて、安堵。お腹の中をきれいに洗って抗生剤で処理したために、時間がかかったようだ。そのため、術後は右脇腹の穴に太いチューブがつけられたまま元の病室に戻った。道東に住んでいた母親が病室に駆けつけてくれていた。
「大変だったねえ」
と声をかけられ、私もようやく死なずに済んだことを実感した。3 番目に手術を受けたAさんも隣のベッドに
「終わった。終わった。」
という表情で横たわっていた。私の場合は、腹膜炎を起こしていたので、1 ヶ月くらいの入院になるということだった。
　手術前は何も考えられない状態だったが、急に大学のことが気になりだした。母に頼んでN君に連絡してもらった。翌日の夕方、理学部に移行していたN君が病室に来てくれた。週末から散々な目に遭い死ぬのかと思ったできごとを話し、
「1 ヶ月は講義を受けられないようだけど、なんとかならないものか」
と相談した。盲腸なら入院は 1 週間くらいかと思っていた彼は驚いたようだったが、しばらく考えて
「薬学部に移行した友達がいるので、講義ノートを見せてもらえるか聞いてみよう」
と言ってくれた。
　3 日ほどして、N君が再び来院し、
「講義ノートOKだって。友達と協力して用意してくれるそうだよ」
と伝えてくれた。薬学部には移行したばかりでだれも知り合いがいなかったので、この知らせに安堵した。N君の友達は、近藤淳一君。その友達は橋本康子さんだった。そのあと、3, 4 日ごとにN君が来てくれて話の相手になってくれたり、将棋につきあってくれたりしていた。1 週間もすると、最初の講義ノートをN君が持ってきてくれた。筆跡が違うことから、2 人が分担して作ってくれたことが分かり嬉しかった。分かりやすく整理されていることにも驚き感謝の気持ちが大きくなった。彼らが病室に来ることはなかったが、その後も 1 週間ごとに講義ノートが届けられた。
　手術後の回復は徐々にという感じで、1 週間たっても右脇腹のチューブからは、茶色の液体が染み出してきていた。微熱も続き、いつ平熱に戻るのだろうかと不安を感じながらベッドに横たわっていた。それから 1 週間、ようやく脇腹のチューブが外され、トイレに行っても良いということになった。しかし、最初はふらふらしてうまく歩けず、驚いた。こんなに簡単に立って歩くことができなくなるものかと。それからは、院内を牛歩さながらに歩み、ときどき階段を昇り降りするリハビリの日々を送った。

私の入院中、私の下宿に泊まり毎日通ってくれていた母が、同じ部屋に入院している人たちについて

「ときどき洗面器に血を吐いている人は、肝硬変。
奥さんが付き添っている人は手遅れの胃がん。
あの子は白血病。骨折して足をつっているのは
タクシー運転手。」

などと教えてくれた。それを聞かされ、自分よりもつらく、もう治らない病気の人たちが同じ部屋にいることを知った。私はずっと微熱が続いていたので、何か言えない病気があって母は隠しているのではないかとさえ思った。私より先に盲腸の手術を受けた隣のAさんは、思いとは裏腹に術後 2 週間たっても退院できずにいた。あるとき、化膿して塞がらない傷口を見せてくれた。私の傷口より 2 倍は大きく、驚いた。インターンが執刀したとか。私のときも院長に怒られていたあの新米医師だ。彼のお姉さんが医療ミスとして訴えると怒っているということだった。衛生状態の良くなかった当時は、10 代の男を筆頭に盲腸の患者が多かったので新米外科医がまずマスターすべき手術だったそうだ。現在は、患者が少なくなったことから、盲腸の手術経験のない外科医が結構いるということだ。

手術から 3 週間後、微熱が続いてはいたものの私はようやく退院することができた。下宿に戻ってさらに 1 週間静養した。その後、再び病院を受診し順調に回復しているということで安心した。その折、私がいた病室に顔を出した。空床になったベッドの隣にはまだ退院のめどがたっていないAさんが横になっていた。1 週間だと思っての入院が 1 ヶ月以上にも及ぶとは、わからないものである。その後、裁判になったか和解したかは知る由もない。

私の方は、ようやく大学の講義に 1 ヶ月ぶりに復帰することができた。N君の友人の近藤淳一君や橋本康子さんが作ってくれた講義ノートのおかげでその後の講義の理解もかなりスムーズだった。講義が始まったばかりであったことから、私が 1 ヶ月休んでもだれからも「お久しぶり」と言われることもなかった。なにしろ、顔見知りはだれもいなかったのだから。それにしても、近藤君や橋本さんにどんな感謝の言葉を伝えたのか、どんなお礼をしたのか、なにも記憶に残っておらず何と情けないことかと思う。その後、各教科の期末試験は 1 つも落とすことなく、無事に単位を取得することができた。あの講義ノートのおかげで、無事に乗り切った 20 歳だった。もし、講義ノートがなかったら、うまく講義についていけず心を病んだあげくに留年していたかもしれない。

その後、私は薬品有機化学講座（上田 亨 教授）で修士課程まで過ごし国立がんセンターに就職し厚生技官となった。近藤君と橋本さんは、隣の薬品製造学講座（伴 義雄 教授）で博士課程まで過ごしそれぞれ製薬会社に就職したようだ。国立がんセンターで医学研究をするために上京して以来、私は彼らに再会する機会は残念ながらなかった。古希近くになって人生を振り返ってみると、あのときの講義ノートは幸運だったなあと思う。同期の彼らの助けがなければ、芳香 ESSAY 72-4 や芳香 SCIENCE 72-7 に記したような人生とは違う道を歩んでいたのかもしれない。この芳香の場を借りて「あのときは大変お世話になり、本当にありがとうございました。」と彼らに改めて深謝の気持ちを伝えたい。

お陰さまで充実した人生となりました。

《追記 1》

N君は、卒業後北海道の大手信用金庫に就職し、最後は副理事長にまで上り詰め、現在は子会社の社長となり活躍している。しかし、彼は 40 歳を過ぎたころ、若年では珍しい膀胱がんを発症し入院する。たまたま帰省していた私が虫の知らせで「1 杯やろうか」と思い、彼の自宅に電話をして入院していることを知った。早速お見舞いに行き、尿道再建術を既に取り入れていた国立がんセンターへの転院を勧めて手術を受けてもらった。体外に袋をぶら下げることも回避でき、その後再発もなく元気に過ごしている。私が急性虫垂炎のとき、恩人だった彼に恩返しができたのは、何かの巡り合わせではなかろうかと思っている。そして、今でも親友の 1 人である。

《追記 2》

学部を卒業して大学院に進学した昭和 52 年 4 月、4 年間暮らした下宿を出て、北 19 条西 1 丁目のアパートに隣同士の 2 部屋を借り引っ越した。乳業会社に就職した妹と私がそれぞれ 1 部屋ずつ使い、食事はすべて妹が作ってくれたので、私は学業に専念することができた。2 ヶ月後のある日、新聞で驚く記事を目にした。私が住んでいた下宿が早朝に出火し、学生が 1 人亡くなったということだった。その後の情報で、出火原因は 1 階の住民の石油ストーブの不始末で、亡くなったのは私のあとに

入居した北大の院生で明け方に帰宅して眠りについた矢先の火事ということだった。私がそのまま住んでいれば、深夜族で眠りも深かった私が犠牲になったに違いないと思った。なぜかすぐ現場に駆けつける気持ちにはなれなかったが、1 年後ぐらいだったろうか、足を向けたその場所にはなにごともなかったかのように真新しい下宿らしき建物があった。

《付記》

令和 5 年春から冬にかけて厚別区のシニアカレッジに通った。そのなかで、「自分史を作ろう」という講座があった。講師は、元松竹映画プロデューサーで寅さんや往年の女優さんとも親交のあった楢部一視先生。91 歳とは思えない流暢な語り口や経験談、そして自分史を作るコツなどを学習した。添削してもらえるというので、その気になって 2 週間ほどで「栄光の影に挫折あり」のタイトルでこれまで封印していた内容を書いてみた。C型肝炎ウイルスの研究の絶頂期と重なるように妻が乳がんを発症し闘病の末、死を迎えたというお話である。楢部先生からは書き方のアドバイスとともに「映画のワンシーンのような内容でとても心に響いた。なので、もっといろいろと書いてみたらどうですか」と勧められた。そんなこともあり、芳香 ESSAY に再び書いてみようという気になった。

同窓会 HP：2024 年 3 月 1 日公開